

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第50集

館林市内遺跡発掘調査報告書

—平成25年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査—

大街道遺跡（平25地点）

当郷遺跡（平25地点）

2013
館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第50集

館林市内遺跡発掘調査報告書 —平成25年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査—

大街道遺跡（平25地点）

当郷遺跡（平25地点）

2013
館林市教育委員会

例　　言

- 本書は、平成25年度に国宝重要文化財等保存整備事業費補助金、群馬県文化財保存事業費補助金を受けて実施した館林市内遺跡発掘調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき以下のとおりである。地点名は、平成25年度の調査であることから、「平25地点」とする。

大街道遺跡　当郷遺跡

- 調査組織は次のとおりである。

調査主体者	館林市教育委員会
担当課	文化振興課文化財係
調査組織	
教育長	橋本 文夫
教育次長	坂本 敏広
文化振興課長	岡屋 英治
文化財係長	石崎 治
係長代理	阿部 弥生
主事	奈良 純一（担当）
主事	田沼あゆみ
主事	田沼 美樹
主事補	金子 陽祐（副担当）

- 調査作業員・整理作業員
飯塚 賢治 久保田憲司 小島 鉄男 坂口 丈夫 杉田 和実 高野 愛
館野 駒三 寺嶋 美雪 根岸 良子 橋本二三夫 原田 和沙 久田 進
前田 清美 三橋 瑞江（50音順敬称略）
- 出土遺物、調査記録及び資料は、館林市教育委員会で保管している。
- 本書の編集・執筆については、奈良、原田が中心となり行った。
- 遺物の実測及びその他の図版の作成は、奈良、金子、根岸、原田、前田、三橋で行った。
- 調査の実施及び本書刊行にあたり、下記の諸氏諸機関のご協力を頂いた。ここに記して感謝申し上げる次第である。（順不同、敬称略）
地権者各位　群馬県教育委員会事務局文化財保護課　（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
館林市建設部都市計画課・道路河川課　館林市環境水道部水道課・下水道課
館林市農業委員会　館林市史編さんセンター

凡　　例

- 本書における挿図の縮尺は、図中に記した。
- 遺跡位置図は、館林市都市計画図（S=1/2500）を用いた。なお、遺跡位置図中のスクリーントーンは遺跡地、■は調査地を示している。
- 土層断面及び出土遺物の注記に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財团法人日本色彩研究所色票監修「新版土色帖」に従った。一部、調査担当者の目視による判断も含まれる。

参　考　文　献

本書を作成するにあたり以下の文献を参考にした。

- 館林市教育委員会 『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』 第1集～第49集
館林市教育委員会 『館林市特別編第4巻 館林城と中世の遺跡』 2010
館林市教育委員会 『館林市資料編第1巻 館林の遺跡と古代史』 2011
館林市教育委員会 『館林市双書第4巻』 1974
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編 『群馬の遺跡7 中世～近代』 2005

目 次

例 言	
凡 例	
参考文献	
目 次	
挿図目次	
写真図版目次	
第1章 館林市の環境	1～2
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1～2
第2章 確認調査の概要	3～8
1. 大街道遺跡（平25地点）	3～5
2. 当郷遺跡（平25地点）	6～8
写真図版	
報告書抄録	

挿図表目次

第1図 館林市の位置	1
第2図 館林市の地形概念図	2
第3図 平成25年度調査遺跡の位置	2
第4図 大街道遺跡（平25地点）	3
第5図 大街道遺跡（平25地点） 基本土層	3
第6図 大街道遺跡（平25地点） トレンチ配置図	4
第7図 大街道遺跡（平25地点） 出土遺物実測図	5
第8図 当郷遺跡（平25地点）	6
第9図 当郷遺跡（平25地点） 基本土層	6
第10図 当郷遺跡（平25地点） トレンチ配置図	7
第11図 当郷遺跡（平25地点） 出土遺物実測図	8

写 真 図 版

大街道遺跡（平25地点）

- 1 - 1 調査地全景
- 1 - 2 土木重機による掘削
- 1 - 3 1 T (西から)
- 1 - 4 2 T (西から)
- 1 - 5 3 T (西から)
- 1 - 6 1 T 北壁セクション (南から)
- 1 - 7 2 T 焼土出土状況
- 1 - 8 2 T 遺物集中箇所 (西から)

当郷遺跡（平25地点）

- 2 - 1 調査地全景
- 2 - 2 土木重機による掘削
- 2 - 3 1 T (南から)
- 2 - 4 2 T (南から)
- 2 - 5 3 T (南から)
- 2 - 6 1 T 東壁セクション (西から)
- 2 - 7 1 T 焼土 (カマド) 掘削状況
- 2 - 8 1 T 焼土 (カマド) 掘削後 (東から)
- 2 - 9 1 T 焼土 (カマド) 掘削後 (南から)
- 2 - 10 3 T 遺物出土状況 (西から)

出土遺物写真

第1章 館林市の環境

1. 地理的環境



第1図 館林市の位置

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口約8万人の都市である。市域は東西約15.5km、南北約8.0kmと東西に長く、総面積は約60km²である。北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町に、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町に接する。明和町の南には利根川が東流し、群馬県・埼玉県の県境となっている。県庁所在地の前橋市までは約50km、東京（台東区浅草）へは約65kmの距離にあり、首都圏との結びつきも強い。

群馬県東南部は、「邑楽・館林台地」地域と呼ばれ、群馬県の中では低地に位置している。館林市の標高は、15m台（大島町東部）から33m台（高根町）であり、おむね平坦であるといえる。本市の地形を概観すると、「低台地」と「低地帯」に分けることができる。市域中央部に「低台地」が東西に延びるように所在し、その周辺に「低地帯」が広がる。

この「低台地」は、「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地であり、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から本市高根に至る台地の北側に沿って、日本最古の砂丘の一つである埋没河畔砂丘が走っており、本市最高標高点はこの上にある。

「低地帯」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成された沖積低地である。台地北側の低地帯には、旧河道・微高地や自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は、沖積低地から延びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東流する鶴生田川及び城沼にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地を開析する谷には、他にも茂林寺沼、蛇沼、近藤沼などの池沼を作り出している。

2. 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は、145カ所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』（市内遺跡詳細分布調査報告書）には、そのうちの144カ所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した、各時代の遺跡数は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡3遺跡、縄文時代の遺跡13遺跡（縄文土器のみ採取できた遺跡）、弥生時代の遺跡は0（弥生時代の遺物を採取できた遺跡2遺跡）、古墳時代～平安時代の遺跡（土師器の出土した遺跡）96遺跡（うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は23遺跡）、古墳は17遺跡（古墳總数25基）、中世生産址1遺跡、中世城館址12遺跡、近世城館址2遺跡である。（ただし、複合した時代の遺物散布地が見られるため、その中心になると考えられる時代でまとめたものである。）

これらの遺跡の分布は、地形的な特徴と大きく関わっていることが察察される。館林市内に所在する遺跡の時代的変遷と地形的な関わりを概略してみると、次のようにある。

《旧石器時代》

この時代の遺跡は、市内の標高の高い地域に集中する傾向を見せる。邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈と地元で呼ばれる内陸河畔砂丘（自然堤防）上に、その多くが確認されている。

《縄文時代》

この時代になると、遺跡数が増えるとともに洪積台地上に営まれるようになる。前期や中期の遺跡は、池沼や谷地を望む舌状台地上の平坦面に確認されることが多い。後期以降には遺跡数は減少し、その所在は、台地の斜面から微高地に移る傾向がある。後・晩期の包含層等は低地（沖積地）におよぶ。

《弥生時代》

弥生時代の遺跡として確認されたものはないが、微高地や台地の斜面等で、遺物などがわずかに確認されている。

《古墳時代》

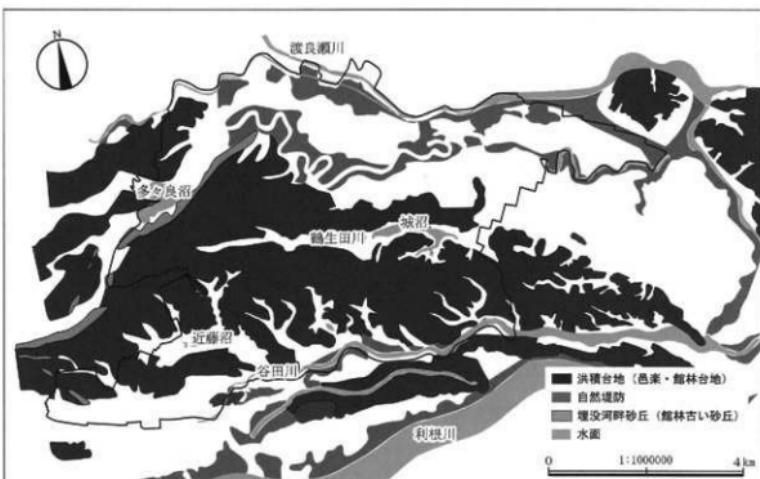
前期の遺跡は少ない。遺跡は、洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在することが多く、この傾向は、弥生時代の遺物散布に似ている。中期には、遺跡の数が増えるとともに、その所在は、台地の斜面から台地上の平坦面へと移行する。後期には、遺跡数は増大し、台地上的平坦部に所在する場合が多い。墳墓としての古墳は、25基が残存している。古墳群が2ヶ所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする内陸河畔砂丘上にある。その他単独のものも多いが、そのいずれもが谷や谷地等をみおろす洪積台地上に所在している。

《奈良・平安時代》

この時代の遺跡は急増する。台地の内部や全面で遺物の採取ができるところから、この時代以降は台地上に普遍的に集落等が營まれてきたことを示唆している。

《中世・近世》

この時代の城館址については、伝説的な要素が多く実体ははっきりしないが、中世末には館林城が築かれ、近世には館林城を中心として城下町が形成された。



第2図 館林市の地形概念図



第3図 平成25年度調査遺跡の位置

第2章 確認調査の概要

1. 大街道遺跡（平成25地点）



第4図 大街道遺跡 (1:2500)

条が確認されたが、遺物は伴わず、その時期は不明であった。土器片が少量確認されている。

また、昭和32年度には表探査が行われており、その成果は『館林双書第4巻』に報告されている。周辺の土地改良に伴う土木工事の際に行われたものであり、縄文時代後期初頭の称名式土器と考えられる深鉢1個体分が確認されている。このほかにも石斧2点が出土した。

(2) 調査の概要

大街道遺跡（平成25地点）の確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ東西に3本のトレチを設定し、土木重機により表土を排除しつつ関東ローム層まで掘り下げた。その後、土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。現地表面からローム層までの深度は約20cm～60cmであった。調査地東側ほど現地表面からローム面までの距離が浅く、西側に移るほど深くなる傾向にある。

(3) 基本土層

本遺跡の基本土層は、第Ⅰ層～第Ⅲ層に分けられる。第Ⅰ層は、耕作土層であった。

第Ⅱ層は褐色土層である。一部に植物の根によるとと思われる搅乱が見られる。下部の第Ⅲ層との漸進的な層であり、層厚約20cmである。

第Ⅲ層は、いわゆるローム層である。粘性・締まりともにややあり、水分が多い。暗黒褐色または黒色を呈する。

(4) 検出された遺構

トレチ内を人力で精査した結果、溝10条、土坑18カ所を確認した。また2トレチ東方では焼土が集中する箇所（1カ所）を確認した。住居などに関する遺構は確認できていない。

調査地点西側に至るほど溝の規模は大きくなり、数は多くなる傾向にある。一部は1～3トレチを縦断すると思われるものもあった。同時に、西側に至るほど土中の水分含有量が多い。調査地点西側付近に水路（雨水渠）が近接しており、これに起因する可能性がある。1トレチ（北側）の西端は特に水分が多い。なお、1及び2トレチの西側各1カ所を深く掘り下げてみたところ、地表面から約120cmで湧水を確認した。1及び2トレチ間を縦断する溝も見られたことから、何らかの水の流れを伴う遺構である可能性が考えられる。

2トレチ内の焼土集中箇所については住居に伴う炉の可能性が考えられたが、焼土内及び周辺に住居などの遺構が確認できないことから、住居に伴うものではなく、屋外で何らかの燃焼行為が行なわれた際の名残であったと思われる。土は固く締まっている。

(5) 出土遺物

確認された遺物は縄文土器と近世のものが中心である。1及び2トレチ西側では遺物集中箇所それぞれ1カ所が見られた。集中箇所は溝状であり、確認位置から1及び2トレチ間を連続しているものと思われる。

2トレチ内東側で確認された焼土内からは黒曜石の石器片が確認された。元の器種は不明である。また、やや円錐上の形をした石が1つ確認された。

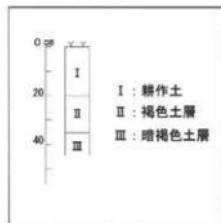
所在地 館林市大街道一丁目845-1、
967-1
調査原因 宅地造成
調査期間 平成25年6月4日～6月15日

調査面積 約120m²

(1) 遺跡と周辺の環境

大街道遺跡は館林市街地西方の洪積台地北西辺にあたり、東武伊勢崎線館林駅から西方約1.2kmの場所に位置する。浅良瀬川の沖積低地に面し、北と西は細い枝谷に囲まれている。城下町の北西隣に位置し、近世から主要街路沿いの地域であるため宅地化が進められてきた。

本遺跡では、平成17年度及び20年度に道路改良工事に伴う試掘調査が行われ、平成20年度の調査では溝状遺構1



第5図 基本土層

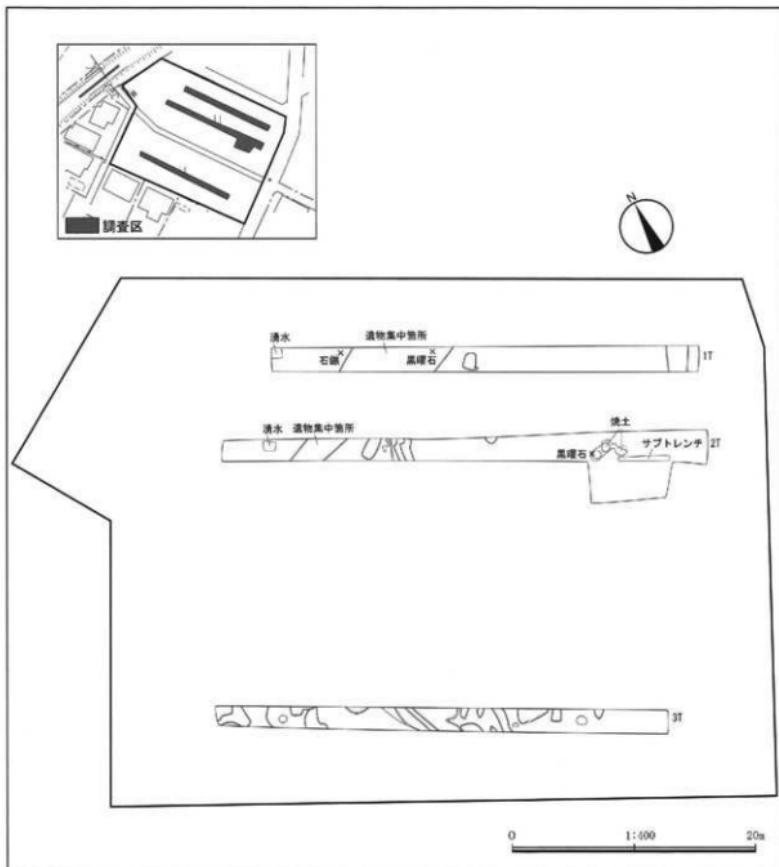
縄文土器は小型の破片が主であり、接合可能な個体は少ない。縁と思われる個体が数点見られたが、器種の特定は困難である。一部個体は雲母を含む。

近世の遺物としては、燈明皿・七輪と思われる個体が見られたが、ともに一部のみであった。また、釉薬を使用した杯の一部や素焼きの土器なども見られた。

(6) まとめ

本調査においては、多数の溝及び土坑を確認した。溝の中には1~3トレンチを縱断する大型のものもあり、一部では遺物集中箇所も見られた。しかしながら、集中箇所で確認できた遺物は小型の破片が多く、住居に関連するような遺構は伴わない。また、その年代も縄文から近世まで幅広く混在しており、接合率も低い。また、遺物集中箇所は調査地内で特に水分の含有が多い場所にあたり、何らかの水の流れ込みの影響によって遺物が堆積、集中した可能性がある。加えて、過去には東から西に傾斜していた調査地は平坦化のための切土・盛土がされており、擾乱の影響による遺物集中も考えられる。

今回の調査により、本調査地点には保存の対象となる遺構・遺物などは確認できなかった。既に土中は擾乱の影響を受けている可能性もあることから、開発行為について埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第6図 大街道遺跡 トレンチ配置図 (1:400)



第7図 大街道遺跡 出土遺物実測図 (1:4)

1. 当郷遺跡（平成25地点）



も平坦化が進み、舌状台地の形状・景観は失われつつある。

本遺跡では、平成7年度に個人住宅建設に伴う発掘調査が行われ、その際は調査区域内に南北3本のトレンチが設定され、溝1条、井戸1基が確認されている。

溝からはほぼ元の形状を保ったカワラケや内耳土器の一部、馬と思われる一部壊した状態の歯などが出土した。井戸は調査地点西側で確認されたが、湧水があり、完掘されていない。遺物は伴わず、年代等は明らかでない。

(2) 調査の概要

当郷遺跡（平成25地点）の確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、南北に3本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後は土層断面の観察を行いつつ、人力で掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。現地表面からローム層までの深度は約40cm～70cmであった。

(3) 基本土層

本遺跡の基本土層は、第Ⅰ層～第Ⅲ層に分けられる。Ⅰ層は表土であり、耕作土のほか、炭や廃棄物等も確認された。

Ⅱ層は陸田耕作に伴う耕盤層であった。5cmに満たない薄い層であるが、調査地点のはば全面に広がっている。非常に硬いが締まりではなく、遺物も伴わない。

Ⅲ層は暗褐色を呈し、粘性・締まりとともにある。調査地点の北側ほど厚い。また、調査地点北側に至るほど水分の含有量が多い傾向にある。ほぼ全面で遺物を伴う。

(4) 検出した遺構

トレンチ内を人力で精査した結果、土坑18ヶ所、住居跡16軒を確認した。また、トレンチ北側は全面で厚い黒色土層が広がっており、一部では湧水も見られたことから、今回の確認調査では全ての遺構の形状を判別できなかった。

土坑は遺物を伴わないものが多く、深さは検出面より40～60cmが多い。

確認された住居跡の形状は正方形又は長方形である。住居跡の中にはカマドを持つものも見られた。住居跡の遺構は数軒が複雑に重複する形で確認された。同一の範囲内に複数回の建築が行われ、長期間に渡って活動の拠点となっていたことが窺える。遺物や住居内の設備等から、古墳時代以降の竪穴式住居を中心であると思われる。

今回の調査はトレンチ内の遺構の有無、可能な限りの形状の確認とし、住居跡等の完掘までの作業は実施しなかった。

(5) 出土した遺物

遺物は古墳時代のものが中心である。少数であるが、カワラケ、陶器が確認された。また、年代不明ながら石器も確認された。

石器は矢頭と思われる個体のほか、用途は不明だが加工されていると思われる個体数点が見られた。近世の陶器と思われる個体は碗の底部と見られ、一部に釉薬の使用が確認できる。

古墳時代の遺物は土師器と須恵器が中心であるが、土師器の量がやや多い。土師器は鬼高期の特徴が確認できる。壺の縁の一部と見られる比較的大型の個体があったが、接合・復元には至らなかった。ロクロの使用痕が見られる個体が多い。

須恵器は内側に青海波文様を伴うものが見られた。また、ロクロの使用痕が明確に見える壺の一部、大型の壺の縁の一部など、複数の器種が確認できた。

所在地 館林市楠町3967番4、3967

番5

道路

調査期間 平成25年9月17日～10月3日

調査面積 約140m²

(1) 遺跡と周辺の環境

当郷遺跡は館林市街地の北東、東武伊勢崎線館林駅から約4kmの場所に位置する。邑楽・館林台地の東部にあたり、城沼北岸の舌状台地上に存する。遺跡の範囲は館林市当郷町及び楠町地内にある。

周囲は農地と宅地が混在する地域である。遺跡の北部は渡良瀬川に連なる低地地帯である。

遺跡の北部は農地、南部は宅地を主とする利用がなされているが、どちら



第9図 基本土層

他にはカワラケが確認された。底部に修復痕を持つものがあり、ロクロ成型の痕、底に残った糸切り痕、内と外の両面には撫での痕が見られた。その厚さは均等ではなく、形状はやや不整形であった。

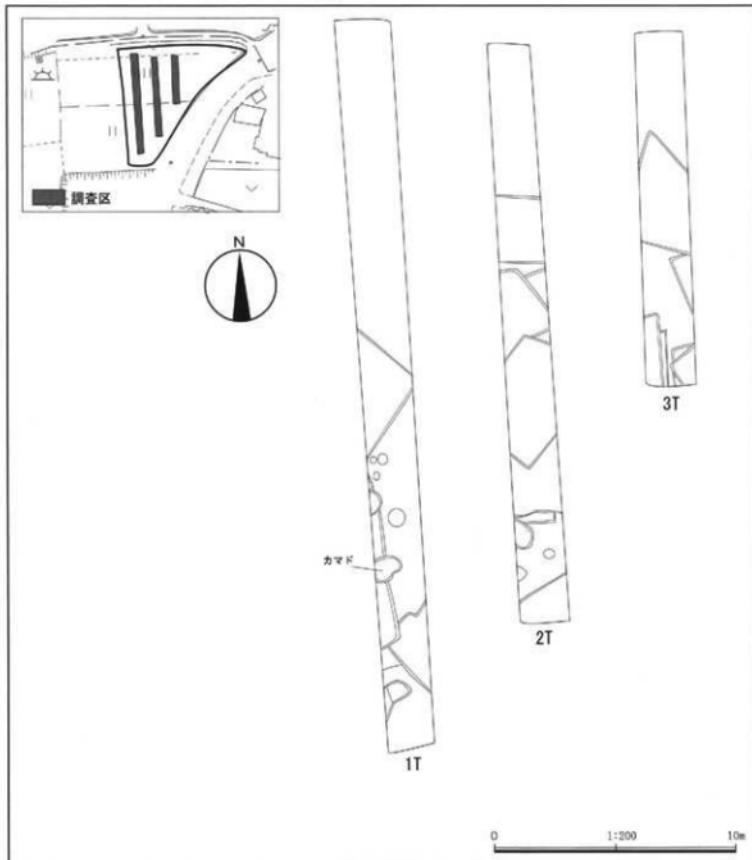
(6) まとめ

今回の調査では、調査地点内にトレンチを南北に3本設置して遺構等の確認を目指したが、結果、全てのトレンチから多くの遺構（住居跡を中心とする）と、遺物（土師器、須恵器を中心とする）が確認された。

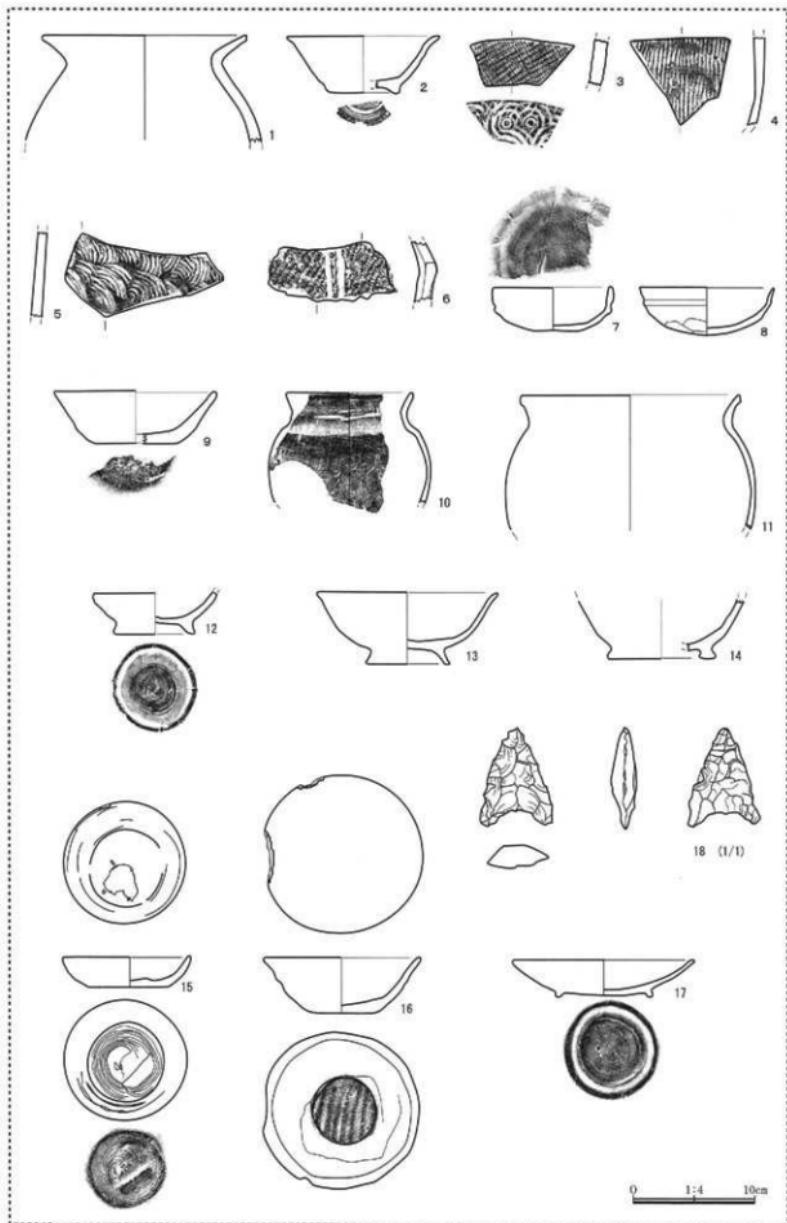
遺物等の状況、住居の形状・設備等から、本遺跡の中心となる年代は古墳後期から平安時代と推定される。調査地点内では多くの住居跡が重複した状態で確認でき、この地点が長期間に渡って人々の生活拠点として利用されていたことが窺える。

確認された遺物の年代は縄文から近世までと幅広いが、その中心は古墳から平安時代頃と思われる。縄文及び近世の遺物は調査地点北側付近で比較的多く見られ、その周辺の土中はやや水分が多い傾向にあり、水の流れ込みによる影響を受けたと思われる。

本調査地点では集落の可能性が推定される多数の住居跡と遺物が確認され、保存を要することが判明した。調査の成果を基に開発者と保存に関する協議した結果、同地点の記録保存のための発掘調査を行うことについて承諾を得た。そのため、平成25年11月から平成26年1月まで改めて発掘調査を実施し、調査地点の全容解明と記録保存に努めた。



第10図 当郷遺跡トレンチ配置図 (1:200)



第11図 当郷遺跡 出土遺物実測図 (1:4)

写 真 図 版

大街道遺跡（平25地点）

(写真図版)



1-1 調査地全景



1-2 土木重機による掘削



1-3 1 T (西から)



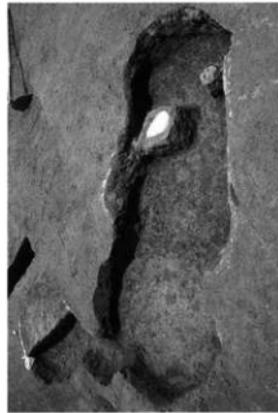
1-4 2 T (西から)



1-5 3 T (西から)



1-6 1 T 北壁セクション (南から)

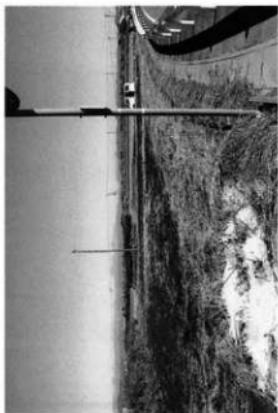


1-7 2 T 墓土出土状況



1-8 2 T 遺物集中箇所 (西から)

当郷遺跡（平25地點）



2-1 調査地全景



2-2 土木重機による掘削



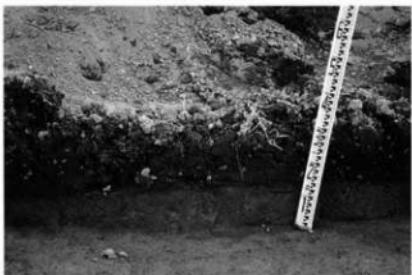
2-3 1 T (南から)



2-4 2 T (南から)



2-5 3 T (南から)



2-6 1 T 東壁セクション (西から)



2-7 1 T 焼土 (カマド) 掘削状況



2-8 1 T 焼土 (カマド) 掘削後 (東から)

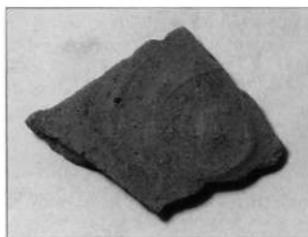


2-9 1 T 焼土 (カマド) 掘削後 (南から)



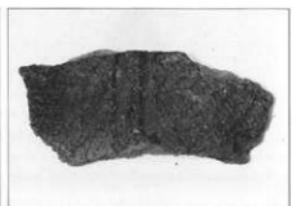
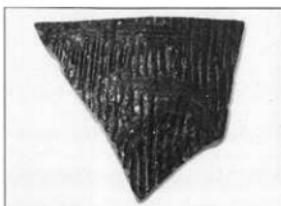
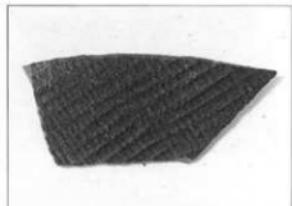
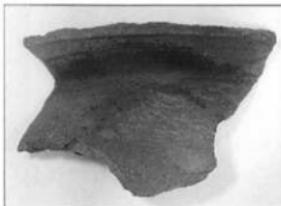
2-10 3 T 遺物出土状況 (西から)

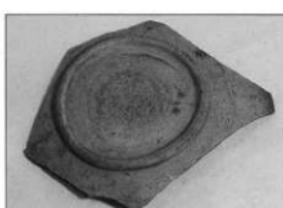
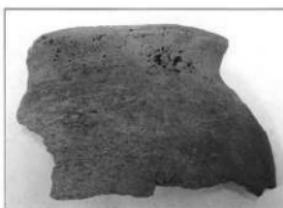
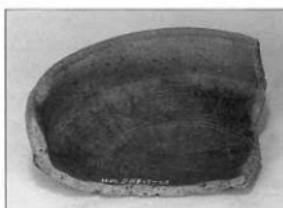
大街道遺跡（平25地点）





当鄉遺跡（平25地点）





抄 錄

ふりがな	たてばやししないいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	平成25年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査				卷次			
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書				シリーズ番号	第50集		
編集者名	奈良 純一 金子 陽佑				編集機関	館林市教育委員会		
編集機関所在地	〒374-8501 群馬県館林市城町1番1号							
発行年月日	2014(平成26)年3月31日							
市町村コード	102075							
所収遺跡	所在地	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
大街道遺跡	大街道一丁目	31	361525	1393130	20130604 ~ 20130615	約120m ²	宅地造成	
当郷遺跡	楠町	83	361441	1393414	20130917 ~ 20131003	約140m ²	道路	
遺跡名	種別	時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
大街道遺跡	散布地	縄文、平安		溝18・土坑10		縄文土器片・陶器片・石器等		慣重工事
当郷遺跡	散布地	古墳、奈良、平安		住居跡15・土坑		土師器片・須恵器片・陶器片・カワラケ		発掘調査

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第50集

館林市内遺跡発掘調査報告書

－平成25年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査－

編集・発行 館林市教育委員会 文化振興課 文化財係（館林市文化会館内）

〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号 電話0276-74-4111

印 刷 上武印刷株式会社

発行年月日 平成26年3月31日



文化財愛護シンボルマーク

<http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/bunka/>